

「ベンチ競争」

小さな公園に鉄棒とブランコが、仲良く並んでいます。

木のベンチと石のベンチがブランコをはさんで、今日

も夜明けと同時に、にらめっこをはじめているのです。

「ぼくの方が人気者だよ」

「皆から好かれているのはこっちだよ」

分譲住宅地の入り口付近に『の春』なかよし公園』

と丸い白木にみどり色のペンキで書かれた公園ができ

て、ふたつのベンチがおかれてから、毎日毎日、ふたり

のにらめっこ競争がつつくよつになったのです。

「ぼくの方が座りこちがいいからね」と、

木のベンチくん。

「元気な男の子がいくら乱暴に跳んだり跳ねたりしても

ビクともしないから…人気があるんさ」と、

石のベンチくん。

(1)

ベンチくんたちは、おたがいに言い張るだけです。

これでは、いつに勝負がつきません。

木と石のベンチくんたちは、にらめっこをひとます中

止して、試合のルールを話し合つことにしました。

朝になると公園の外灯の明かりが消え、日が暮れはじ

めると、ふたたび点りはじめます。

試合の時間は、外灯の明かりが消えている間と決め、

ベンチに座つた人数の多い方が勝ちにしようということ

で、ふたりの話し合いがつかまりました。

「今日はぼくが勝ちだよ」

「明日は負けるものか」

ベンチくんたちの競争心は、日を追つことにますます

激しくなっていくばかりです。

(2)

□□□

□□□

雨降りの日をのぞくと毎日、朝と夕方に白い犬を連れたおじさんが、散歩の途中に、必ず木のベンチに腰掛けてタバコを吸ってひと休みしていきます。お供の犬もベンチに飛び乗って、おじさんの横に寝そべるのです。

石のベンチには、木のベンチの脇にある灰皿がうらやましくてなりませんでした。

木のベンチくんが、

「点数にイヌも加えるようにしようよ」と、

試合のルールの変更を申し込みました。

夜になると、毎晩のように野良猫の親子四匹がやってきて石のベンチの上でゆっくりと時間をかけて毛並みを整えはじめます。

「ネコも得点に入れなければ不公平だよ」と、

石のベンチくんも言い張りました。

(3)

ふたりの意見が合って、動物も得点に加えることとなり、試合時間の方も、昼夜を通してやろうと、大幅に延長されることになりました。

若葉が濃いみどりになってきた五月のある日

保育園のこどもたちが、先生二人に連れられて、なかよ

し公園にやってきました。みんなで十六人です。

いつも静かな公園が、急ににぎやかになりました。

園児たちは、ブランコに乗ったり、鉄棒にぶらさがった

り、あちのベンチ、こちのベンチと駆けまわります。

ベンチくんたちは、座った人数を数えるのにもう目をま

わしてしまいました。

梅雨の季節には、公園を訪れる人がめつきり少なくな

り、休戦状態がつづきましたが、ベンチくんたちは、決

してにらめっこ競争を止めることはありませんでした。

(4)

梅雨明けのある夕方

生まれたばかりの赤ちゃんを乗せた乳母車を、木の

ベンチの脇に止めて、お母さんがひと休みしていきま

した。次の日も、その次の日も、木のベンチに座って

乳母車の赤ちゃんにやさしく微笑みかけていました。

「しめしめ……これで二点は確実だ」

木のベンチは、赤ちゃんがすすくと大きくなるこ

とを考えてニンマリするのです。

石のベンチくんにもよいことがありました。

夏の終わりのある日の午後

激しい夕立がありました。ザーと降ってすぐに止ん

だのですが、ふたつのベンチはもうびしょ濡れです。

□□□

□□□

(5)

木のベンチの方は、なかなか乾ききらないのですが、

石のベンチの方は、しばらくすると、なんとか座ること

ができるまでに乾きはじめました。

スーパーからの買い物帰りのふたり連れのおばあさん

が、石のベンチにハンカチを広げると、並んでおしゃべ

りをはじめました。

□□□

□□□

にらめっこ競争をはじめた春が過ぎ、石のベンチくん

が少しばかりリードした夏が過ぎ、秋になってからは、木

のベンチくんの優勢な日が多くなってきました。

その秋もそろそろ終わろうとしています。

半年以上もつづいたにらめっこ競争に、ベンチくんた

ちは、もう疲れ果てていました。

(6)

公園の入り口に植えられたハナミズキの枝に残っていた最後の一枚の枯れ葉が、散ってしまいました。

木のベンチくんも、石のベンチくんも、朝からため

息ばかりついているのです。

一週間ほど前に、初雪が降りました。

ふたりとも、急にさみしくなりはじめ、にらめっこ

競争をつづける気力を、もう失ってしまいそうにな

っていました。

ときどき学校帰りにフランクに乗っていく男の

小学生がいましたが、木のベンチにも、石のベンチに

も腰掛けようとする人は、まったくいなくなっていました。

いました。

□□□

□□□

とつとつ外灯の帽子にも雪が積もりはじめました。

(7)

ベンチくんたちは、だんだん心細くなっていくので

した。朝から木のベンチくんも、石のベンチくんも、もじもじしております。

なかなか思い切りがつかないようです。

ふたりとも、チラチラ流し目を送りながら、はにかんでいるようです。

やっと決心がついたようです。

「あの……」

「あの……」

ふたりは、同時に話しかけました。

「雪が積もりだしたよ」

「さみしくなってきたね」

「ふたりぼっちだね」

はじめのひと言が出れば、もうだいじょうぶなのです。

ベンチくんたちの会話がはずんでいきました。

「まじにらめっこ競争なんてやめなすね」

(8)

「春はるになったら仲良なかよくしようよ」

「大賛成だいさんせいだよ」

ふたりともそれはそれは晴はれ晴はれとした表情じやうじやうです。

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

木きのベンチくんも、石いしのベンチくんも、いく度も
いく度も笑顔えがおでうなずきました。

「元気げんきだね」

「君きみこそ元気げんきだね」

「春はるが待ち遠まちしいよ」

「ぼくも同おなじだよ」

春はるになって、『なかよし公園こうえん』の看板かんばんを、『にらめ

っこ公園こうえん』に、書きかえる必要ひつようはもうなさそうです。

しだいに激はげしくなってきた雪ゆきのなかに、ベンチく

んたちの姿すがたは、やがて見えなくなってしまうました。

(おわり)